

二喜多林小

直永德

---

小林多喜二  
徳永直

新潮社版



日本文学全集 24

小林多喜二  
徳永直

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年9月25日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(260)1111(大代) 振替東京808 郵便番号162

印刷所／株式会社三秀舎 製本所／新宿加藤製本所

本文用紙／本州製紙株式会社

函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社

カバー・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス・日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします

Printed in Japan 1967

目次

小林多喜二集

滝子其他

五

蟹工船

二

東俱知安行

九

党生活者

一三

徳永直集

太陽のない街

二二

八年制

三八一

あぶら照り

四〇五

注解

四三三

年譜

四三九

解説

四五五

平野謙

小林多喜二



## 滝子其他

### 一

毎日の掃除を終えて、酌婦しやくふの初恵と光代が屋根裏になつてゐる室へ上つてきた。光代は襦すきを外はずしてその辺に投げ出すと、両手で着物の腰を一寸つまみ上げた。桃色の腰卷の端と白い太い脛すねの腹が出た。そして「汗ですっかり着物がねばる。」と言つた。

初恵は鏡台の向きを直して、首だけを鏡のすぐ前につき出して、パタ／＼と鼻頭はなさきに白粉の袋をたゞきつけた。終ると、鏡にフランス刺繡ししゅうのしてある覆いを下して、隅の方へズラしてやつた。

「チイタカ、チイタカ、チツチツチ」と、光代が足拍子をとって、室の中を一寸行きもどりして、窓際に坐つた。初恵も並んで坐ると、光代の肩に手をかけた。

屋根のトタン板が熱しているので、屋根裏の室の中はムーンとしていた。蠅が時々ブーンと羽音をさして飛んでいた。

「眠い／＼。」滝子が膚はだぬぎになつて入つてきた。大柄な、白い肌の女だった。

「あれ。」

窓から外を見ていた光代が、通りを指さした。初恵もその指の方を見た。「まあ！」

「チョット、滝ちゃん。」

光代が振りかえつて滝子を呼んだ。滝子は腕を袖そでに通しながら「何よ？」と言つて、二人の間に割り込むように坐つた。

「ねえ、あれさ。」

二人が見ていたのは、多分三、四日前位に結婚したような夫婦連れだった。

「へん！」

滝子はずまんなそうに身体を起すと、くるつと向きをかえて、室の中を、ワザと足に力を入れて、笑談じょうだんをしているように歩き出した。二人は吸いつけられたよりに見ていた。



「妬いたねえ、さては。」

光代が振り返らないで、そう言った。

「何がさ、そんなもの……」

舌打ちをした。が、窓の方へ来ると、滝子は顔を出してもう一度外を見た。が、すぐ顔をひっこめて、手をブラン／＼させながら、身体をその度にくねらし、室の中を歩いた。「あれア、あれさ。」ひとりごと独言のようにそう言った。

二人の姿が向う角に見えなくなったとき、初恵と光代は同時に、

「うらやましい！」と言った。

滝子は「あれア、あれさ……あんなもの。」思い出したように時々言った。

下で光代を呼ぶ声があった。光代が立つと、初恵もついて下りて行った。二人が居なくなると、滝子は急いで窓から首を出してみた。さっきの二人連れはもう見えなかった。何かがっかりしたようにうなだれて、眼尻がチカ／＼してきた。

「何アに、あれアあれさ……」

ひくく独言をした。

\*

滝子は今見たその男がこの家に来たことのあるのを、記憶の何処からか探し出した。憶病気にオズ／＼していたことがある。それが最初だった。酔って友達と来たことがある。すっかりもの慣れて、大胆な、淫猥なことを女に平気でしたことがある。がそんな事は、別に際立ってはつきり分らなかった。然し、「お前達をみると、俺は何時でも心が暗くなるんだ。これは世の中の何処かが間違っているからだ。」と言ったことが、前と後の連絡なしに、その男と結びついて、ハッキリ今でも思い出させた……滝子は、自分達のところへ来て、それからしばらくして来なくなった沢山の男を思い浮かべてみた。そういう色々な沢山の男が、然しそれ／＼にちアんとした家庭を持って暮しているのだ、と思った。そして自分達はいえは！ 滝子は自分の身体のまわりを見回してみた。

二

階段をギシ／＼いわせて、光代が上ってきた。

「どうしたの？ ハイ、手紙。」

そう言つて、滝子の前に手紙を投げ出した。滝子はさっきのまま、身体を動かさずに、目で投げ出された手紙の送り人を見た。

「馬鹿にしてる。」そして、ものうく「一寸封を切つて読んでみて頂戴い。」と言つた。

「何言うのさ、コレからの手紙を……」

「読んでくれなくなつたつて、本当は中に書いてあることは分つてるの……僕は貴女を愛していますさ。それで是非僕は貴女と一緒にになりたい。貴女のような方をそんな泥の中にふみにじつて置くことは……なんて。」

「ハイ、ハイ……有難うございますだ。」

「何十回も同じ文句ばかり読ませられたら、大概頭の悪い奴でも暗誦出来るようになるだろうさ。男つて綺麗な女を見ると、スグ、僕は貴女を、とくるんだよ。助平な奴さ。」

滝子はそう言つて、大儀そうに封を切つた。「何んでも手紙が来ないようにするには、手紙を便所で使う紙にしてしまえばいゝつてねえ。」

「うん。」

「でも、まあ、よッく皆がみんな、書く文句が一字一句も異ちがわないんだねえ、感心してしまふ。」

「そして口先ばかりでさ……」

「男はねえ、綺麗な女を見ると、すぐ××したいと思ふの。それが素人の娘とか、他人の奥よさんとかとなると、まさか、ねえ。ところが、忒、参田もあれば、××出来る女がいると来ているから持つて来いさ。男はねえ、実際……」

滝子は立ち上つて、帯をしめ直した。「こんなに股の肉がなくなつてしまった。」

光代はごろりと寝ころぶと、側に投げ捨ててあつた雑誌をとりあげて、あつちをめぐつたり、こつちをかえしたりした。そして独言のように、

「なんだか今度の検査は……駄目らしい。」と言つた。

「気をつけないと、馬鹿みるよ。」

「身体も悪くなるし、……もう最後ねえ。」そう下から滝子を見上げて、うつろな笑い方をした。

「私なら助平男の、××を、病気でくさらしてやるよ。そして嬬かあも子供にもうつさしてやりたい。お陰様で嬬が始終腰をまげて、\*\*\*がつたり、子供が目くされ

で、つんぼで身体中腐れて生れてきたら、どんなにす  
ウとするか。」

「まあ、何時のまにそうなったの。」

「ふん、だ。」

「来た頃は毎日××した後では、この室へ夢中にか  
上ってきては、あすこの夜具布団ぶとんの上に身体をなげ出  
して、お母あさん、私、私なんて泣いていたのにさ。  
それに……」

「何んだって、昔のことなんか引ッ張り出してくるの  
さ！」

滝子は強く言って、然し何処かオドくした眼差まなざしを  
窓の外へそらした。

「それに、初めて検査がある時なんか、行かないく  
ッて……」

「いッッてー」

「まあ、いゝさねえ。誰でもそうなんだから。××や  
×××のことなんて、平気で言えるようになるし……  
……だんくこれア普通の人間様から遠ざかって行くん  
だろう。」

「いやだく……なぐるよ！」

滝子は立ったまま、足で光代の腰のあたりを押し  
た。そして階段を下りて行った。

「滝ちゃん、あとで××を見てくれない。×××たか  
つてゐるらしい。」

光代は後からそう言った。

茶の間へ入ると、初恵は女将おかみの用事で、外から包み  
をもって帰ってきた。台所で女将と何か話していた  
が、茶の間に入ってきた。

「姐さん、今ねえ、昔の小学校の友達に街で会った  
の。」そう言って、黒瞳くろめの多い、つぶらな目で滝子と  
見上げた。パチくとしばたいてきたように思っ  
て、新聞をとり上げた。そして

「そう？」

「前から分ってたんで、反対の側の家の下を通って見  
られないようにしたんだけど……こんな風になったの  
を見られるのが恥かしかつたの。だけれど……」

「そんな事……」

「だけれど、あのお友達が、自分達の仲間からこんな  
ものが出たと思つて、かえつて、あの人恥かしく思

わないか、と……ねえ。」

滝子は一寸新聞から目をそらして、初恵を見た。それから又新聞を見た。が、読んでいなかった。一所ばかりを見ていた。光代が何時か「初ちゃんはまるでどの滝ちゃんを見る気がする。」と彼女に言ったことを思い出した。

「変な目だよ、本当に……」

滝子はおくび交りに立ち上りながら、独言のように言った。そして又階段を上った。初恵も後から上ってきた。

「初ちゃんは幾つだっけ？」

「まあ……十七よ。忘れたの？」

「十七、ねえ。十八になると、初ちゃんでもやっぱり十八のようになるだろうねえ。」

「何を言ってるの。おかしいよ。」

「十七、十八、十九……と。」語調をかえて、「何んだか、今日息苦しくて、お酒でもウンと飲みたい気がするの。」

室の中から、

「又暴れてもらったりすると、迷惑するから、もう大

酒だけはど免してくれ。」

光代が言うのが聞えた。

三

「チヨットく。」

闇をすかして、光代が声をひくく呼んだ。そしてチヨットくと単鳴ねずみきをした。

「ニャンゴく。」男が猫の真似をした。「ハ、ハ、ハ、ハ。」

「馬鹿にしているよ、チエツ！」

光代はクルリと後向きになって、足で後へ砂を蹴ける格好をした。その時懐手ふところをした男が近寄ってきた。

「どうだい、景気は。」

そう言って光代と一緒に立っていた初恵の手を握った。彼女は何も言わないで男の顔を見つめた。

「馬鹿に無愛想だなあ——目がいゝぞ、うるわしの瞳よ、か。」

「オイく品物じゃないんだよ。」

滝子が側から、男のような声を出して言った。

「凄いなあ！品物でなくても、式円で……ねえ。へ

へんだ。」

「ソラ、後から巡査が来た！」

滝子がそう言うのと、息をつまらして、クック〜と笑った。「親にも言えないことや、国定教科書にも書いてない事なんか、しない方がいゝよ。みっともない。」

「へエ！」男は友達に「オイ、退却だ。」と言って、握っていた初恵の手を、「キュツ、キュツ、キュツ、サンキュツ。」と振って、離れた。

「馬鹿にしてら。」光代は後でしゃがんでいたが、そう言った。

男達は二軒置いた隣りの「即席御料理」の方へひやかしに寄った。

この時三人連れの男が来た。そして、この越後屋の中に入った。女達はこれで女将にも工合がいゝ、そう思って、家へ、男の後から入った。皆入ってしまったら、光代は外の方を一寸うかゞつてみて、それから男の下駄三足を、菰をかぶった酒樽さかだるのわきに隠した。

三人のうち二人は二、三回来たことがあった、が他の一人は十八、九の初めての男だった。

「急ぐんだ。」

一人がそう言って初恵を側に引き寄せて頬へチュツとキッスをした。酒にすっかり酔っていた。

「汚いねえ。」

そこを手で何度もふきながら、真赤になった。

「さあ、行こう。」

男は初恵をつれて立ち上った。「あばよ。」出口でチャップリンのような格好をして、戸をぴしゃりと閉めた。

「俺もだ。N、お前はこの女とだぞ、いゝか。」

一人は光代を連れて出た。

「学生さん、しっかり！」光代が男の腋わきの下から首だけを出して、出しなに言った。

若い男は何も言わなかった。皆が出てゆくと、モジモジし出した。

「君、幾つ？」男は乾いた声で言った。

「十四」

舌の先へじいと酒をしばらく置いて、飲み下した時言った。

「嘘？」

「幾つに見えて？」

「二十か二十一……」

「じゃそうして置こう。いいでしょう、別に……」

一寸黙った。

「……どうしてこんな所にいるの。」

男はまんとの襟のあたりをいじりながら、きいた。

滝子はちらっと男を見た。

「こゝはねえ、越後屋っていうソバ屋でしょう。分る？……貴方の商売は何？……裁判所の方？……」

市役所の方——戸籍係？」

男は独言のように口の中で何か言った。そしてソワソワして立ち上った。滝子は見向きもしないで、

「どうするの？」ときいた。

「君……こんな商売いやだとも思っていないのか……本当の、いゝ生活をしたという風な……」男は顔を真赤にして、早口に言った。

「もう、連れの方は終るよ。こゝに式田出してるんだもの、早くしたらどう？」

「そんな事どうでもいゝよ。」

「困ったわねえ。分り切ってることさ。なんなら貴方の妹さんに訊いてみればいゝよ。」

「妹？……」

「お母さんでもいゝし、貴方の恋人いひとでもいゝし……妹さんが式田で……お前さん、少し頭が悪いねえ。」

滝子は、こういう男は丁度はぐれた鳥のように、時迷い込んでくることを知っていた。が、その友達が又そういう男をそのままにして置かないことも知っていた。

「まあ、お飲み、さあ……」

そして、男の耳元に口をあてて「何んにもならない他人ひとごとは心配するもんでない。」と言った。

「俺はねえ、友達のようにそう呑気になれないんだ。——君等の苦しみがそのまま自分の苦しみのようなんだ。」

「じゃ、どうするっていうの。例えば私を貴方の奥さんにでもしてくれるというの。裁縫を習わしてくれたり、夜学校へ通わしてくれたりして。」

男は熱心に女を見た。

「ところが、この小樽だけで何人こんな女がいますか、思っているの、そして毎日何人平均こんな女がどん／＼製造されていると思うの？　とても駄目々々。追い付

きつこないさ。それに第一、貴方がこんな所の女が好  
きになれるもんでないよ。」

男は何か言い出しそうになった。

「ウソ、ウソ！ 何か熱に浮かされてるんだよ。そんな事此頃流行はやってるんでしよう。私これで、二、三十回も、今貴方が言ったのと同じことを聞かされて来ているんだもの。そしてそれは何時もそれッ切りだったの。だからそういう人を見ると……」

滝子は眼をキラ／＼光らせて、妙に笑いながら云った。

「皆一寸した若い人はそう言うんだもの……笑談なんか言いッこなし。」

滝子はそう言って、男を廊下に連れ出した。「静かに歩くんだよ。」

そして一つの室の前に立ち止った。障子の隙間を自分でのぞいてから、男を代りに押してやった。男はそうされるまゝに覗のぞいた。二人は一言も言わないで、元の室に帰ってきた。——男の顔には血の気が少しも無かった。咽喉のどが乾いて、唇のあたりがピク／＼とけいれんしていた。滝子の顔も凄味オトシカをもっていた。彼女は

だまって、酒を飲んだ。男はじいと別な一方だけを見ていた。二人は何んにも言わなかった。

#### 四

滝子が室へ上って行くと、初恵が窓から外を見ていた。足音で、ちらっとこつちを見た。目が光っていた。

滝子は一寸鏡に顔を写して、髪を直した。それから何か言おうとして、初恵の方を見たが、顔をそむけた。光代も上ってきた。が、すぐ下で手がなったので「へ、エ——エ」とキーンとした返事をして下りて行った。途中まで下りて行ったと思うと、又上ってきて、階段の降り口に顔だけ出して、

「済まないが、滝ちゃん、鏡台の引き出しから商売道具を投げてよこして。」と言った。

滝子は無表情に、チリ紙を出して、なげてやった。

「チイタカ、チイタカ、チツチツチツ」そして下りて行った。滝子は、イラ／＼したように、その辺を二、三回歩いていたが、下から呼ばれて下りて行った。

下の入口でガタ／＼と乱れた足音が初恵に聞えてきた。「又か。」と思った。男が何かどなっている。廊下

をギシ／＼いわせて、室へ行くのが分った。酒に酔つてゐるらしかった。

外では、まだ子供が鬼遊びなどをして騒いでいた。初恵には自分もそんな事をして遊んだ記憶が返ってきた。——彼女はぐったり窓に身体をもたれさしていた。

「もう帰る、糞ッ！」

「勝手に！」滝子の声。

足音。キャツ／＼とはしゃいでいる光代の声も聞えてきた。

と、トン／＼と光代が上ってきた。

「野郎、いけすかない奴。こんな乱暴しやがって！」と、着物の前を合わせながら、息を切らしていた。髪の毛がすっかりこわれていた。

「初ちゃん、又かい。」

そう言つて、どっこいしよ、と側に坐つた。酒臭い匂いが初恵に来た。

「お母さんの事かい、又。——お前さんが考えてるよりに、お母さんの方じゃ考えていないさ。」

初恵は光代の方を見た。

「まあ、今のうちにはそうするさ、仕方ない。滝ちゃんだつて、この私だつて——おかしいでしょう——初めは皆んな初ちゃんそっくりそのままだったのさ。」それから早口に「が、何時のまにか、こう呑気のんきになつてしまつたのさ。それにねえ、本当のところ、そうなた方が気楽でいゝんだ。うまくいつてるもんだよ！」

「私、そんな……とても……」

光代はそれをきくと、ぐでんと室に仰向けに寝ころんで、

「こんな、こんないゝ商売なんてあるもんか。」と自分に言うように言つた。

「すき放題に、どんな男とも×××出来る……一晩に、もっとも、五人もあつちや一寸困るけどさ……」

初恵は窓の外へ眼をそらした。

「チイタカ、チイタカ、チツチツチツ」光代は足をばたばたさせた。

「好きなお客と寝た夜さは、

鳥カシも鳴くな、

夜も明けな。

嫌なお客と寝た夜さは、か、



烏も鳴くな、か、

夜も明けな、か。」

「うまくいってる。」光代は仰向けに寝たまゝ足で軽く拍子をとって唄った。

下で、手が、鳴った。

「又！ チェッ。」

光代が立ち上った。

「さあ、行こう。気なんか腐らさないで。忙しいと、そんな事考えないよ。」

初恵をせき立てて、二人階段を下りた。

## 五

階段の下り口に女将が立っていた。

「何をベラ／＼長話してるんだよ。」と、どなった。

「へエ、へエ。」

光代が言つて、てれたように自分の尻をたゝいた。

室に入つて行くと、二人のお客の間で、滝子がすっかり酔つて何か言つていた。光代が一人の男の側に身体をくつつけて坐ると、片手を男の膝の上につきながら、

「ちよいと、景気がいゝんだねえ。煙草を私にもものましてよ。」

そう言つて、男の咬くえていた巻煙草をとつて自分のんだ。

「驚いたなあ。」

「酒のみ、煙草をのむ女となつたのであります。」

何処かできてきた活動写真の弁士の真似をした。

男の一人が「うまい／＼」と言つた。それから前からの話の続きをした。

「じゃ、君はこういうのか——淫売婦がいなくなつたら、世の中がそのはけ口が無くなって、一般の善良な男女の風俗が乱れてくるって——」

「そうさ。そうだよ。地球が無くならない間——男に性欲というものが無くならない間、絶対になくならないよ。」

「じゃ君は女が肉の切り売りしなければならぬことを認めるんだねえ。」

「仕方がなく——<sup>\*</sup>Necessary evil だ。」

「と、君はその Necessary evil は、男の性欲から来ているんだねえ。」